

# PHD LETTER

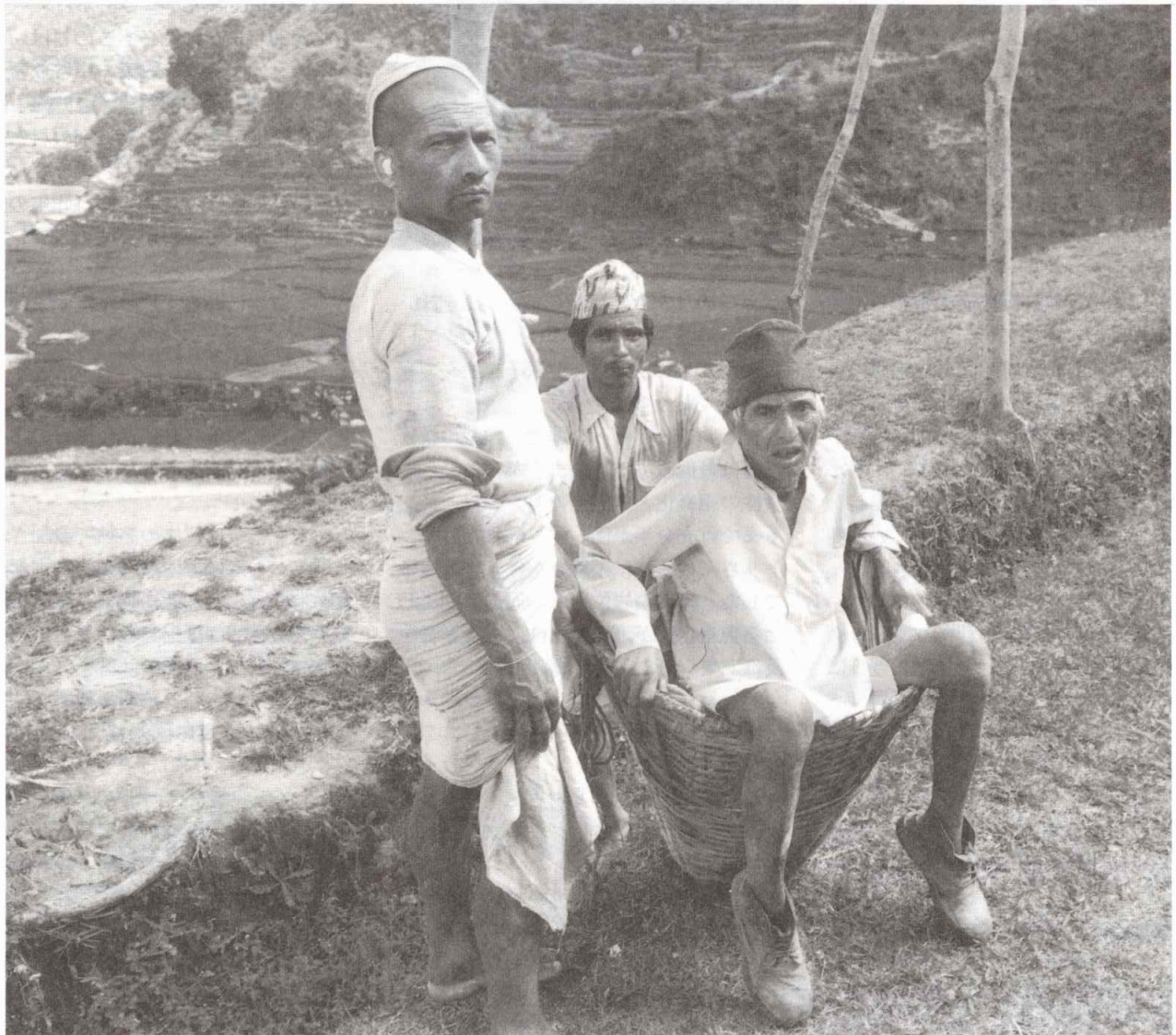
## 64

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1997・9

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 求められる新しい協力関係…………… 2 P
- 第2回ビルマ・フォローアップ&スタディツアー…………… 3 P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：草地 賢一  
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867  
定価：100円



ネパール マハデブスタン

籠に入って数時間、  
山道を揺られてやってきた。  
ここは山の村の小さな診療所の庭。  
治療が終れば、同じ道をまた戻る。  
陽のあるうちに家につけたらいいね。

## 草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

久しぶりにネパールを訪ねました。カトマンズには車が増え、朝夕のラッシュ時にはその排気ガスがあふれ、盆地の上空に雲ができる程だといわれています。サヒさん(83年)、ガウチャンさん(85年)、ビドゥルさん(96年)の新旧の帰国研修生と話し合い、かつて私が提案した研修生間の情報交換、相互学習を進める「カトマンズ・ステーション」を復活していくことになりました。遠く西ネパールの山中にあって地道に地域保健活動を進めるサンバさん(83年)やポカラのラダさん(83年)にも年一・二回PHDのスタッフ訪問時に一同に会す機会をつくり話し合ってもらうことを提案しました。ビドゥルさんが連絡役になってくれることになりました。

バラト・ピスタさん(82年)が村長として働いたクンタ村への訪問途中、パンチカルにある家族計画協会の進める寄生虫対策計画の一室にアディカリさん(84年)を訪ねました。青年海外協力隊の田中助産婦などと共にフィールドコーディネーターとして元気に活躍している様子でした。クンタ村に着くとビショさん(95年)にも会えました。二ヵ月程前からカトマンズでお兄さんのやっている商売を手伝っているとのこと。ピスタさんが創設したサマ・セワ・サムハ(SSSという村の住民団体の飲料水供給プロジェクトや保健プログラムなどを見学。翌日にはカトマンズのビドゥルさんの新居(バラトさんの妻の実家でSSSのカトマンズ事務所も兼用)でじっくりとピスタ父子と協議しました。彼は村長を引退し現在はネパール全域の草の根NGOの総合コンサルタントのような働きをしています。

「草地さん、PHDも新しいステージにたつてSSSのような自立を始めてい

## 求められる新しい協力関係

るネパールのNGOとパートナーとしてどう働くかを研究する時期ですね」と言われたことが印象的でした。今後従来の研修生を招くことに加えて、帰国後組織され成長しているCBO(地域住民組織)と、例えば女性の自立支援活動を協働して研究実施することなど課題として取り組むことを話し合いました。



帰った研修生と私

ポカラのラダさんは数年前からお連れ合いが退職され、少しゆっくりできていたようですが、娘さんが双子を産んで家に戻っており多忙の様子。

貧しいひとびとへの編物、洋裁の技術指導は最低限やっていますが、これらの女性の組織化と自立へのエンパワーメントまでは充分手が回らず、それだけサビトリさんの研修に期待をかけている様子でした。姫路の岩佐さんの過去数回にわたる現地指導が地元の女性に大変影響を及ぼしていることを実感しました。

バンコクで12名の第2回ビルマ・スタディ・ツアーのメンバーと合流し、7月23日から約一週間ティン・アン・ウィンさん(92年)を中心とするミャウタダイシエ村の地域組織化グループを訪ねる旅を実施しました。

治山治水が行き届いていないため雨期のラングーン/マンダレー間の国道一号线でも激しい洪水で難渋しました。約20

時間かかってマンダレーに25日早朝到着。仮眠の後に村を訪ね、ウィンさん、トゥンティンさん(93年)、ムームーさん(93年)、トゥントゥンさん(94年)、カインソーさん(96年)が進めている移動図書館、小規模信用組合活動、上級学校進学のための奨学金支給、補習塾そして村人の眼や耳を広げる国内研修旅行活動など、多彩なそしてともすれば政府から危険視されかねないエンパワーメント活動を見聞しました。

「2020年までには必ずこの村はマンダレーのニュータウン政策の中に飲み込まれてしまう。その前に意識と知識、意欲と技術をもった村人と共に別の村に移住し農民共同体をつくる」というウィンさんの決意に答える若者の群は昨年の倍の約10人に増えています。彼の「シンプルライフとハイシンキング」(高い志をもって質素に暮らす)のたたずまは年を追ってシャープになっているようです。

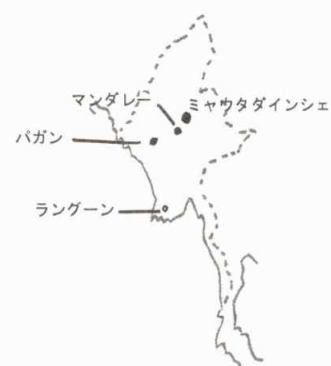
ネパールと同様PHDはこのように育ってきているCBOと今後どのように協働するのかを宿題として与えられました。

このツアーに77才の高齢で参加された田畑英一さんは旅のつれづれに中学生、大学生などの参加者に戦争の経験者として、又被差別部落出身者としてその苦難の体験に基づく適切な助言をして下さいました。「あらゆる差別を無くし、助け合うことこそ真の国際協力、交流である」と。

人生の大先輩にこのように教えられた旅の参加者及び帰国研修生たちはそのおかれた地域で人間の国際的、社会的公正実現のために大いに闘ってくれるだろうと確信しました。

総主事 草地 賢一

## 第2回ビルマ・フォローアップ&スタディツアー



第1期研修生の指導の時から支援をいただき、94年のツアー参加者でもある渡辺省悟さんのお口添えもあり、これまでも講演、料理講習会などで交流のあった丹南国際理解センター(兵庫県丹南町)を通じ7人の参加がありました。また九州などからの参加者を加え総勢13人。7月22日から7月31日の日程で5人の研修生の帰ったミャウタダイシエ村を訪ねました。以下、参加者の感想文より、抜粋で掲載します。

清水 加津江(兵庫県丹南町 団体職員) 村での出来事。赤ちゃんを抱いた女性が、私に赤ちゃんを抱かせてくれましたが、女性が何か笑いな言っています。おしめをしていないから、おしっこしたらごめんね、とのこと。思わず叫んだ私を見て、周りの人たち、子どもたちは大笑いしていました。

村では、常に笑い声が響き、大人も子

どももみんな親切でした。赤ちゃんを抱いた女性も、言葉が通じない事が分かっているはずなのに、一生懸命私に話しかけてくれます。笑顔で何度も何度も。不器用な私は引きつった笑顔を返すだけで精一杯でした。あの時不器用な日本人の笑顔を、あの女性はどう受け止めた事でしょう。本当に、比べて村の人たちの屈



村の中を牛車でまわる参加者

託のない笑顔は、村を励まそうと行った私たちに逆に励まして、元気づけてくれるような笑顔でした。ウソのない心からの笑顔。日本人の自分の心を決して見せないカモフラージュの笑顔(愛想笑い)とは全く違った彼女たちの表情の中に、私たち日本人の忘れかけている本当の幸せが、少し見えたような気がしました。

### 田中 千恵(兵庫県丹南町 中学生)

遊びをする時も、小さい子からけっこう大きい人まで混じって、自分達で遊びを考えたり、サッカーをしたりして遊んでいました。私たちはどうでしょう、遊びたい時、テレビに向かって機械に相手をしてもらう事が多いように思います。また、外に出て数人集まってサッカーなどをやるにしても、ほとんど同じ学年の子とだけやる。いや、私達にはそんな時間さえないといってもいいのかもしれませんが。学校から帰ると塾へ行っておそくまで勉強、帰ってから学校の宿題などと、今日は何曜日だから、何日だからと休まるひまのないくらい多ぼうの日々です。しかし、ビルマでは、時間の流れがとてもゆっくりしているように感じました。今日は何曜日と曜日にまで追いかけれなくてすむのです。

### 榎原 麻衣子(福岡県久留米市 大学生)

自分のこれまでの生活や考え方が甘過ぎたと実感した。また、歴史を正しく理解すること、歴史を受け継いでアジアの人々と接することの重要性を学んだ。

### 北村 純江(兵庫県丹南町 教員)

さて、目的地の村では5人の研修生を

中心に村人こそぞつてのプログラムが待ち受けていました。

まず、トゥンティンさん手書きの日本語による報告書を使って活動について聞きました。トゥントゥンさん、ムームーさん、カインソーさんたち研修生の日本語と村の若者のビルマ語によって相互に内容を理解しながら進められました。活動内容にも感心しましたが研修生達が村に帰ってどの様にリーダーシップを発揮しているのかを知り、彼らの地域発展計画への篤き思いに感動しました。

こうして、貧しさの中でも意欲と優しさの溢れた人々との交流が出来ました。日本からの参加者は中学1年生から77才の高齢者まででしたが、お互いが、それぞれの感じ方で感銘を受けた事と思いません。私としては、ことに中学生や大学生の方々が今後の生き方に反映させてくれる事を期待しています。

### 内山 和重(福岡県北九州市 大学生)

僕が外国へ行くこと“内山和重”としてみられるが、同時に日本人という目でみられる。人それぞれの人格があるのだから、ほんの数人に会っただけでその国をイメージするのはすこし危険だと思う。ビルマで研修生の人たちに会って話をした中で、僕はいつもどこかでビルマ人というメガネをかけてみていた。しかし実際に僕がみたのは、その人たちのアイデンティティなのだ。

日本人はとかビルマ人はとか、あの民族はなんてことは軽くないんじゃないだろうかと思う。

### 新家 美佐子(兵庫県丹南町)

心のこもった手料理、人なつこい子供達の瞳が心から離れない。学校が休校のままという、信じられない国政に怒りを覚える。集会の自由すら無い国とは。こんな現況下、身を挺して村人に溶け込んで、村の向上に力を注がれるウィンさんの笑顔は救いであった。

\*ツアー終了後、新聞によると大学を除いて、閉鎖が解かれた模様。

### 村川 玲子(大阪府吹田市)

私は研修生のひとたちの感想を。トゥンティンさん ひたむきな農業に対する姿勢、優しさ、人の良さ。前歯の欠けた何とも人を魅了する笑み。彼にはビルマの土を感じます。

トゥントゥンさん シャープな切れ。人を引っ張る魅力。リーダーとなる素

養、素質。彼は今後一段と力を発揮する事と感じ楽しみです。

ウィンさん 落ち着きと判断力が今後すべてをまとめていくようでミャウタダイシエ村の将来を感じます。

### 雪岡 正太(兵庫県丹南町 中学生)

僕が、ビルマに行って一番強く感じたことは、子供達の事、年齢は同じでも僕達と比較すると、身体が小さい事でした。

僕達は当たり前のように学校に行き、当たり前のようにご飯を食べて、当たり前のように勉強しています。しかし、ビルマの子供達は、その当たり前が出来るような現状でない事を知って大きなショックを受けました。

世界の子供達が、みんな平和で、平等であるために、僕達が一生懸命考えていきたいです。

### 内山 信子(福岡県北九州市)

毎年、研修生を私たちの地域に招いて、交流してきているが、それが貧しい村で精一杯に努力し、若い人々と協力して村のために日本での研修を生かそうとしている研修生の方々の、いったい何の役に立っていたのだろうか・・・。日本でのささやかな活動は何だったんだろう



洪水で立ち往生したトラック

か・・・。砂漠の一滴にしかすぎない行為ではなかったのか・・・。中途半端なやさしさや、親切だったのではないだろうか・・・。研修生の村を離れるときに、いろいろと思いがよぎりました。

けれどもその後バガンを経てラングーンに戻る道中で、また新しい人たちとも出会いました。お互いの出会いを大切に、元気を得、学び合いながら、ビルマの国はビルマの人たち、そして私は日本で、自分の住んでいる地域で生きていこう、そう思い直しました。

私は、やっとのことでアジアの国の一つビルマにやってきたと思いました。今までの生活の中の活動の結果として考えていたのですが、ビルマを旅して、行き着いたのではなく一つの始まり、出発ではないかと気づかされました。

# 15期生

来日から4ヵ月がたちました。4人の15期生は元気に研修を続けています。

研修のまとめをすると、4人とも口をそろえて日本語は難しいと感想を言いますが、言葉が足りないところは、観察力で補い徐々に研修の内容も深まってきています。

今年度は3人の農業研修生を迎えているため、従来の研修先はもちろん、兵庫県内、県外を含め新しいところにも広げて研修を行なっています。

## ワニ・ソミさん

(パプアニューギニア)

渋谷富喜男氏(神戸市)～中野宗嗣氏(兵庫県春日町)～君塚昌俊氏、橋本慎司氏(兵庫県市島町)～草の根生活塾(兵庫県篠山町)～戸出善弘氏(兵庫県三田市)



渋谷さんご夫婦と野菜の出荷をする(神戸市)

いくつかの農家を回る中で、ワニさんにとって同じ野菜でも少しずつ時期をずらして種を播き、収穫の時期もずらす方法が新鮮だったようです。ワニさんの村は山あいの小さな飛行場から歩いて2時間、郡の中心地からは車で15時間、さらに歩いて10時間かかる所にあり、近くに大きなマーケットはありません。そのため、自然と、自給をベースにした農業になります。畑で多種類の野菜を作り、鶏、豚、山羊などの動物も飼っているの、食べることに困ることはありません。けれども、一度に種を播かずに、時期をずらして収穫できるようになれば、今以上に多様なものを食べられるのではないかと、楽しげです。

また、春日町の中野さんのお宅では、酪農と牛糞を使った堆肥を学びました。ワニさんも水牛を飼い、その糞を利用し堆肥を作っていますが、中野さんのお宅で、牛舎の床をセメントで作られ、糞、尿を有効に集め、堆肥を作る場所に屋根を付けて雨風の

影響を受けないようにすることが印象に残ったようです。けれど、それを帰ってすぐ実践することができるかという、少し違うようです。ワニさんのベディング村は、近くに車の通る道がないため、外から入れるものは歩いて運ぶしかありません。そのため、良いと思っても新たなものが必要になると、時間もお金もかかり、大変です。けれども、ワニさんは、研修の内容をていねいに記録し、将来、近くまで道ができた時にやってみたいと話しています。これからの研修でも、現在の状況に合ったことももちろんですが、将来の参考になることも広く学んでいきたいと意欲的です。

## アンボン・クルワンさん

(タイ)

広岡史郎氏(兵庫県福崎町)～色作郎氏(兵庫県市島町)～笹間正典氏(鳥取県日野町)～草の根生活塾～佐藤茂明氏、清水長男氏、荒井水産(岐阜県河合村)／PHDひだ友の会(岐阜県高山市)



笹間さんから野菜づくりの指導を受ける。(鳥取県日野町)

アンボンさんは4人の研修生の中では、一番日本語に苦労しています。また、高校卒業後親元を離れ、今は山に住む子供が学校

に行けるように作った寮の手伝いをしているので、農業の経験も豊富という訳ではありません。けれども、明るく頑張っている指導者の方々からも評価いただいています。また、研修から帰ってきてじっくり話を聞いてみると言葉での説明はなかなか難しいようですが、畑や動物の飼育など見たり、経験したりしたこと、タイのそれを比べ違ふところはなぜ違うのか、そこからこつこつと学んでいます。

例えば、畑に雑草が生えるのを抑えるために、苗の周囲にわらや草を覆うマルチという技術がありますが、それを見たアンボンさんは、草なら村にもたくさんあるし、簡単にできるから、帰って試してみると話しています。アンボンさんの話によると彼の住むメラノイ周辺では広く農業、化学肥料が使われているようです。けれども除草剤が缶ジュース約1本分で約300パーツ(1パーツ=約4円)と決して安くはありません。上手にマルチができるようになれば、農業を買わずにすみ、また保水効果も期待できるので水をやる手間も省けるのではないかとアンボンさんは期待しています。農業の研修では、気候、風土、また初めてのくくらいお金をかけることができるのかなどの条件が違うところから、日本での方法



これが一色さんところのワラのマルチ(兵庫県市島町)

をそのまま持ち帰ることは大変です。けれども、アンボンさんは見るものの中から、出身地域でも使えること、応用できることを、上手にみつけているようです。これからも、あせらずに、じっくりと研修を続けていきたいです。

## ハリエオ・ゲオバさん

(パプアニューギニア)

牛尾武博氏(兵庫県市川町)～小前彦彦氏(兵庫県丹南町)～渋谷雅弥氏(神戸市)～東門隆夫氏(兵庫県篠山町)～草の根生活塾～大森昌也氏(兵庫県和田山町)

ハリエオさんはパプアニューギニアで10年前に2年間の農業研修コースを受講しており、有機農業の知識は十分にあるようです。その上で、日本での研修から持ち帰れる技術を学びたいと意欲を持っています。大きな機械を使う日本との違いにとまどいも大きいようです。そんな中で、ハリエオさんが興味を持ったのは農産物の「流通の形態」です。

ハリエオさんは、まず家族の食べるものを作り、たくさんできれば近くの市場に売りにいきます。けれども、一日中、市場に



牛尾さん宅で平飼による養鶏を学ぶ(兵庫県市川町)

座っていても売れないこともあるそうです。売り先が固定していれば、市場に長時間座っている必要がなくなり、収入が安定します。まずは、知り合いに話してみようグループを作り、うまくいけば、グループも自分の畑も大きくしたいと話しています。

ハリエオさんは、これまで滞在した農家で「産消提携」を見てきました。農業、化学肥料を使わないで作った「安全な食べ物」を食べたい消費者と、有機農業の生産者がグループを作り、直接野菜や米を売り買っています。ハリエオさんの考える流通はそれをそのままということではありませんが、産消提携をヒントにパプアニューギニアに合った新しい流通をハリエオさんが工夫して生み出せれば、と期待したいです。

## サビトリ・シュレスタさん

(ネパール)

岩下富子氏、谷田治氏、外岡茂子氏、ささやま保育園、篠山町デイサービスセンター/田辺美起枝氏、山岸永子氏(兵庫県篠山町)～高砂市保健センター、兵庫県高砂保健所、水野道子氏/天野敬三氏、船田昭信氏(兵庫県高砂市)～尾崎食品株

式会社(神戸市)～太陽保育園、池口たみ子氏/岸政次郎氏(兵庫県八鹿町)～草の根生活塾～吉田淑子氏/児島章氏(兵庫県西宮市)

編み物のグループの推薦で来日したサビトリさんは、基本的な保健衛生、栄養の知識を学ぶことと、編み物、洋裁の技術の習得を研修のテーマにしています。

6、7月は保健を中心に研修しました。日本では、お母さんが自分の子供の健康、成長に関心を持って、検診や離乳食の実習などに集まってくるのに驚いています。また、保育園、デイサービスセンター等訪れる先々で衛生管理が行き届いていることにしきりに感心しています。

サビトリさんの出身地ボカラはネパールで2番目に大きい町です。近くに病院もあり、国連や外国のNGOによる保健教育を受ける機会も村に住む人々に比べると多くあり、サビトリさんも保健衛生の基本的な知識は既に持っています。けれども、そういう講習に関心を持ち出かける人は限られているようで、衛生や栄養の具体的な知識から一歩進んで、どうすれば皆に関心を



吉田先生に編み物の指導を受ける(兵庫県西宮市)

持ってもらい、人を集めることができるのかということに、より興味を持ち学んでいます。今後の研修では、各地での住民への呼びかけ、啓発の工夫にも力点を置いて学んでいきます。

8月に入り、編み物の研修も行いました。サビトリさんは5年前から2期生のラダさん(83年)が作った編み物グループに参加しており、編み物の経験もあります。サビトリさんは、言われた通りに編むことはできるが、独力で編むことはできないそうです。そこで、吉田先生のところでは、10cm角のゲージ(編む模様のサンプルのよ

うなもの)を作り、それをもとに目数を計算する方法を学びました。

編み物や洋裁の研修をする時に、最初は目新しい素材やデザインに惹かれ、作品を仕上げることだけに気がいきがちです。もちろん目新しい作品を持ち帰ることで、村の女性の関心を引きつける効果も期待できます。けれども、実際に自分でグループを作り継続していくためには、それだけではなく、先生から離れて自力で様々な寸法、デザインのものを制作することができる技術を身に付けることも必要になります。

サビトリさんは、編み物、洋裁、パッチワークも学びたいと希望しています。新しいことに挑戦し、広げていくことも大切ですが、それらの全てを研修するには時間が限られています。そこで、一通りかじってみて、本当に興味があるのは何か、持ち帰れる技術は何かを考え、後半期に深めていきたいと思っています。

## 帰国研修生短信

### チル・カエウさん

(95年・カンボジア)

96年春に帰国後、LWSという団体のワーカーとして働いていましたが97年4月より転職。日本に来る際にお世話になった日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)の村担当のワーカーに採用され、タケオ県プレイカバス郡で仕事を始めています。

### ラニー・サイロンさん

(91年・パプアニューギニア)

「仲間と一緒に活動しています。まず、食べ物を作り売って、その売上げで材料を買い、服を作ったり、ビームという手編の袋を作ったりして売っています。ゆっくりですが、すすんでいます。」——手紙より

### レル・サバさん

(90年・パプアニューギニア)

「新しくパン焼きのストーブが入りました。ほかに新しいことはあまりないですから、いいレポートではないですね。はたけのしゃしん送ります。」——手紙より

62号の5ページで、西條遊児さんのお名前をあやまって西城と記載してしまいました。お詫びして訂正いたします。





## 編集後記

私とこのレターとのかかわりは、5～6月に行われた国際協カワークショップに参加したことから始まりました。ゲームを通じて自ら体験することにより、楽しみながら様々な問題を考えさせられました。異文化ゲームトウヤットでは、言葉が通じない民族とのコミュニケーショ

ンがなかなかうまくいかず、苦労しました。そこで、じっくりと時間をかけて交渉していくと、ついに相手の民族の興味を引くような出来事が見つかり、それをきっかけにして、やっと相手のということが理解できました。たとえ言葉が通じなくても観察力をもって接していけば、いつか通じ合えるようになることを経験。サンドイッチの寸劇では、3人の方の名演技に拍手を送りながら、それぞれが幸せになるためには、お互いに相手の立場を思いやる歩み寄りがいかに大切かを知り、正方形ゲームでも、全体がよくなるためには、譲り合い助け合うことを考えなければいけないと思いました。一つ一つ

のゲームを終えるごとに、他の方の意見や感想を聞き、その度に自分の考え方がいかに狭く乏しかったかがわかり、もっと広い視野で見なければならぬと痛感しました。ワークショップを終え、事務所に時折出入りし、研修生と交流をしたいと思っています。そして研修生の意見や感想、会員の方の投書やお便りをまとめて、ホットな話題を伝えられるレターの編集に関わっていきたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。 J

編集メンバー 大谷 緑、大西 緑、岡部潤子、北村淳子、児嶋愛恵、中村智子、野田圭子、藤島ゆみ

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。